Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

サンドの『ジャンヌ』を境界の物語と して読む

坂本, 千代

(Citation)
近代,104:1-14

(Issue Date)
2010-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002938

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002938

サンドの『ジャンヌ』を境界の物語として読む

坂本千代

1　境界とは

境界とは何だろうか。それは同時にふたつ（またはそれ以上）の領域の周縁に位置する場所、あるいは中心（正統、主流）から遠く離れ、隣の領域にも属するあいまいな部分を指す場合もあるだろう。このような境界においては、周縁ゆえのさまざまな不都合が見られるかもしれないが、また同時に、中心にいては持つことのできない視点や思想も生まれる余地があるのである。

例としてジョージ・オーウェルの反ユートピア小説『一九八四年』（一九四九年刊）を考えてみよう。主人公ウィンストンの悲劇を引き起こす原因のひとつは、彼が支配階級の周縁に属していることである。完全な情報操作、歴史改竄、異分子の排除によって大衆を管理するエリート階級（党員）に属してはいるものの、末端の役人である彼には、独裁者ビッグ・ブラザーが君臨する全体主義的な社会システムのからくりの全貌を知ることはできず、ましてやそれを変えることなどはできない。一方、党員の下に位置する大衆（「プロール」と呼ばれている）は、無知のままに置かれながらも、自らの境遇にあまり疑問を持たず、けっこうたくましく生きている。ウィンストンのほうは、体制を変えようとする陰謀に加担するが、結局もっとも残酷なやり方で破滅させられることになる。この作品を読むと、彼

がエリートと大衆との境界領域にいたからこそ、自分たちの社会の理不尽さを強く意識するようになったのだということがよくわかるのである。

それでは十九世紀フランスに生きたジョルジュ・サンド（結婚前の本名はオーロール・デュパン）の場合はどうだったのだろうか。彼女は貴族の父と庶民の母との間に生まれた。彼女の出生からして二つの階級の境界なのである。オーロールは成人し、作家ジョルジュ・サンドとしてのキャリアを選ぶのだが、当時のフランスでは文学者や音楽家などの「芸術家」は階級的にかなりあいまいな存在であった。才能のある芸術家は貴族や大ブルジョワと親しく交際することのできるエリートではあるが、彼らの大部分の出自は平民であり、経済的にもさして豊かではなかった。彼らは十九世紀フランス社会を動かす支配階級とその下に位置する大衆のどちらにも属さない、あるいはどちらにも属することのできる人々であった。オーロールはさらにジョルジュという男性名をペンネームにすることによって、男女という区別さえも曖昧にする（ごく初めの頃を除いて、当時の読者はジョルジュ・サンドが女性であることを知っていた）のであり、作家サンドは男と女の領分を意のままに往来することとなったのである。

本稿では、彼女が一八四四年に発表した『ジャンヌ』を検討することにしよう。この作品を執筆していた頃のサンドは、パリに対する「地方」、都市に対する田舎、町の人に対する農民、カトリックに対する民間信仰（キリスト教以前のガリア地方にあった宗教の名残）などに大きな関心を寄せていたのであった。

『ジャンヌ』は序章および二五章で構成されているが、序章とそのあとの一〇章では、寒村トゥル・サント・クロワ[1]およびその周辺（エピネル、ジョマトル石、ファドの洞窟）で物語が展開する。次にブッサク城[2]とその周りの農場を舞台にしているものが全部で一三章あり、全体の半分を占めている。そして残りの二章はモンブラの塔にかかわるものである。本稿では、この小説におけるブッサク城の役割に注目することによって『ジャンヌ』の物語の構造を

明らかにし、またこの作品の提起する問題について考察することにしたい。

2　半分は町に、半分は田舎に

序章では旅行中の三人の青年が、ジョマトル石の上で眠っている若い羊飼い娘を見つける。青年のひとりレオン・マルシヤはその娘について次のように言う。

> きりっとしたところは少ないものの、より刺激的なマルシュ地方のタイプと境界で混ざりあうブルボネ地方の美しいタイプの娘だ。[3]

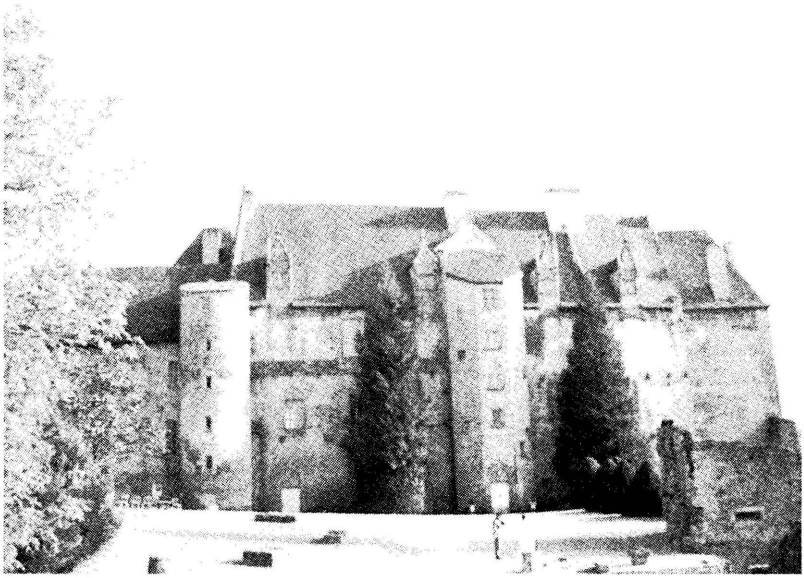
境界（frontière）という語は、小説の語り手がもっとのちにトゥル（正式にはトゥル・サント・クロワ）についても用いることになるが、それはこの美しい眠れる羊飼い娘ジャンヌの住む村のことである。その部分を読んでみよう。

> まさしくこれがビトゥリゲス族とアルウェルニ族[4]の間の国境地域の防衛の最強の要塞が変化した姿だ。新たな境界画定で、クルーズ県の管轄区域にかなり前に編入されたのだが、かつてはベリーとマルシュ、コンブラーユとブルボネであったあいまいな地域だ。マルシュ伯爵領自体、中世に形成され、戦いの勝敗に任せて、また、領主たちの運命の浮沈に応じて狭まったり、拡大したりした。トゥルは、中世にあって、コンブラーユに接したベリー州のいちばん端の境界だったのだ。[5]

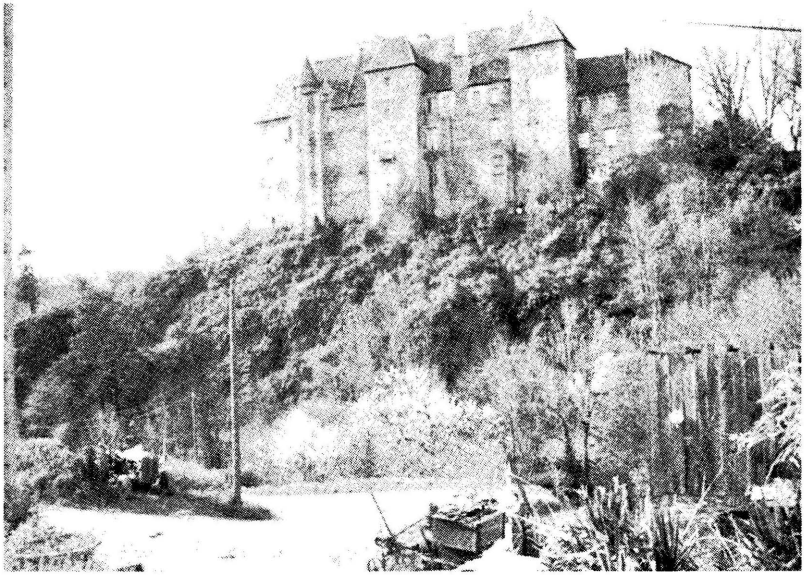
この引用より少し後で、トゥル村の司祭アランはほとんど同じことを若き領主ギョーム・ド・ブッサクに語る。司祭によれば、その昔トゥルはベリーとコンブラーユの境界に位置していて、重要で人口も多かったのであり、その頃は大勢の人々を引き寄せふたつの異なる国の国境を形成する「都市」として機能していたのである。だが『ジャンヌ』の時代（十九世紀初頭）において、語り手はトゥルをテバイド（Thébaide）と呼んでいる。これは初期キリスト教徒が隠棲したエジプト南部の地名であり、そこからさびしい隠棲地や過疎地を意味するようになったのである。昔の都市トゥルは人口が減って力を失い、新しい境界画定によって国境からも遠く離れてしまっていた。トゥルは今やただの田舎でしかなくなってしまったのである。

『ジャンヌ』において、昔のトゥルが担っていた役割を持つ場所として登場するのがブッサク城であり、それは次のように描かれている。

> この城の半分は町に、半分は田舎にある。中庭と紋章で飾られた正面は町に向いている。だが、裏側は、それを支えている垂直な岩石とともにプティット＝クルーズ川の流れまで降下し、すばらしい景色を見はるかしている。岸壁の中で蛇行して流れ落ちる切り立った滝、栗の木々が点在する広大な牧草地。果てしない地平線、目がくらむほどの深さ。城の要塞がこちら側で町を閉ざしている。要塞は今も残っている。町は要塞を越えなかったのだ。そして、この物語の主人公である若き男爵ギョーム・ド・ブッサクの母、現在のブッサクの奥方様は果樹園から田舎に、あるいは中庭から町に思いのままに行き来していた。[6]



ブッサク城の正面



ブッサク城の背面

2007年 Danielle Bahiaoui 撮影

ブッサク城の境界としての特徴、すなわち、町と田舎を分かつと同時にそれらが出会う場所としての地理的な特権を利用して、作者はこの小説のメインテーマのひとつを提示している。それは「町と田舎の葛藤」である。

ブッサク城は田園的な価値観や美意識が町（都市）のそれらとぶつかる場として描かれる。たとえば、トゥルではファド（妖精）や奇跡に対する信仰が未だに存続しているのに対して、ブッサクではそれらは否定され軽蔑されている。ファド信仰を持ち続ける主人公ジャンヌとは違い、彼女の友だちでいっしょに城で働くクロディーは次のように言う。

> あんたがファドたちの話を始めると、あたしは怖くなるわ。あんたがよくわかってるように、もう信じたくないのよ、あたしは。田舎じゃその話は通用したけれど、町じゃだめよ。誰だってばかにするわ。[7]

さて、ブッサク城においては、ブッサク夫人の友人シャルモワ夫人（夫は副知事）という人物がジャンヌを迫害し、そこから追い出すことになる。彼女は田舎や地方の町の住人に対する優越感をあからさまにする言動によって、大都市パリの人々の価値観の体現者となっている。そしてまた、彼女は当時の日和見主義の成り上がり者のカリカチュアとして描かれてもいる。というのは、彼女の夫は最初ナポレオン皇帝の侍従であったのに、その没落後はすばやく転身してルイ十八世側について出世してきた人物とされているからである。

3　たそがれ時

第一〇章ではブッサク夫人とシャルモワ夫人の年齢・容姿・性格などが彼女たちの会話を通して明らかにされてい

る。彼女たちがいるブッサク城のサロンの「帝政時代に流行したみすぼらしい小さな肘掛椅子」や「暖炉の上の大きな羽目を十分に覆わない、ルイ十五世様式の枠をつけたいくつかの鏡」などに言及したあと、語り手は「こうした家具調度類と並はずれた城との間に見られる避けられぬ対照が、先祖たちの立場に比べて、今日の貴族階級をいやおうなくひどく弱小にし、ひどく貧しく見せている」と続けている。この「避けられぬ対照」は貴族階級の栄光の時代のまさに周縁部にあるブッサク城の位置を明示していると言えよう。しかしながら、このサロンにはまだ十五世紀の栄光を喚起させるものが残っている。それは一角獣と貴婦人の模様のタピスリー[8]である。

このサロンのもっとも美しい装飾品は異論の余地なく、好奇心をそそる謎に満ちたタピスリーだ。この壁掛けは、今日なおブッサク城で目にすることができるが、ズィズィム[9]によりオリエントからもたらされ、彼が囚われの身であった長い間、ブルガヌフの塔を飾っていたと推測されている。だが、私はオービュッソンで製作されたと考えている。この点について話せば長くなるから、ほかで語ることにしよう。そのタピスリーが囚われの身であった高名な異教徒の倦怠を慰めたこと、そして、それをわざわざ命じて作らせた、ロドス島のヨハネ騎士修道会総長だったブッサクの領主ピエール・ドービュッソンの手に戻ったことはほぼ確かだ[10]。

このタピスリーに関して、サンドは一八四七年に「マルシュ地方とベリー地方の片隅」というエッセイを書いており[11]、その中で、一角獣は荒々しい処女性のシンボルだとして想像の翼を大きく広げている。『ジャンヌ』の中でブッサク城のこのタピスリーの模様については述べられていないが、右の引用部分で語り手はそれらを「高名な異教徒」ズィズィムと結び付け、また、それらを作らせたのが昔のブッサク領主であったと推測している。

タピスリーにまつわるこのような記述はこの小説におけるジャンヌ・ダルクの姿を少しずつ準備しているかのようである。というのも、異端者として火刑にされることになる歴史上のジャンヌはイギリス人たちに引き渡される前に、ズィズィムのように塔に幽閉された経験があったからである。（彼女はそこから飛び降りて脱出を図り重傷を負ったが、『ジャンヌ』のヒロインのほうも、閉じ込められたモンブラの塔から飛び降りて死んでしまうことになる。）そのうえ、ブッサクという名はジャンヌ・ダルクの戦友の高名なブッサク元帥ともつながっている。この点について、語り手は皮肉な調子で次のように述べている。

> 地域で優位に立つためにブッサク夫人が持っているのは、せいぜい帝政時代よりも尊重されているこの名前ばかりで、それだけで彼女は王政復古に結びついていたのだ。[12]

さて、ブッサク城における最初のシーンは非常に象徴的な意味合いを持っている。それはブッサク夫人とシャルモワ夫人の「たそがれ時」の会話で始まるからである。先に見たように、この城と登場人物たちは実際のところ貴族階級の栄光のたそがれの時期に身を置いているのだ。日没後のこの城はどうなるのだろうか。この点に関して、第二一・二二・二三章に出てくるモンブラ城はブッサク城を待ち受けているかもしれない運命を指し示すかのようである。モンブラ城の広大な廃墟は、金持ちの平民で野心的な弁護士レオン・マルシャ（序章で眠っているジャンヌを見つけた青年）の所有である。石工だった彼の祖父が、おそらく大革命の頃に、これを買い取ったからである。貴族階級に対するマルシャの屈折した感情を、語り手は次のように述べている。

自分が城主であると感じ、一般的に貴族が抱く自尊心に対して、彼は皮肉と復讐心にみちた密かな快楽を感じていた。要塞の壊れた紋章の小さな盾に彼は、いくつかの敬虔かつ大胆な銘とは逆に、「わが金銭そして我が権利」と喜んで書きもしただろう。[13]

ブッサク城の運命はどうかというと、所有者たちは昔の栄光を失い、どんどん貧しくなっていき、いつの日かそれを手放さなければならなくなるだろう。この小説中ではブッサク城がたそがれ時に描かれているのに対して、モンブラ城のほうは、第二一章でジャンヌが見るように、すでに宵闇の中に沈んでいるのである。

4　マージナルな人々の出会う場

『ジャンヌ』において、境界としてのブッサク城はまた出会いの場としての機能も果たしている。ここでは主要な女性登場人物であるマリ・ド・ブッサクとジャンヌに目を向け、そのあとジャンヌ・ダルクについて考えてみたい。

まず、ギョームの妹マリであるが、彼女は自分の所属している階級を嫌い、そこから逃げ出したがっている。

この情熱的な若い娘は社交界に出たことがなかった。それを知らなかった。予感を働かせてそれを嫌悪していた。[・・・]彼女は崇高この上ない狂気を行うことができた。もしテバイドがどこにあるか知っていたら、十二歳で砂漠に暮らしに行きもしただろう。十七歳のとき、人間社会のただ中にあって社交界の虚栄をことごとく捨て、その不公平この上ない規則と戦い、ほかと離れた生活を夢見ていた。[14]

彼女は自分と兄を「この不公平で愚かな上流社会に逆らうふたりの奴隷」とみなしていた。このようにマリは、自分の属している階級の価値観や伝統的で保守的な信仰を受け入れることのできないマージナルな人物なのである。語り手の表現によれば、「異端の」少女であり、その彼女がある日ジャンヌと巡り会ったのである。ごく自然にマリはジャンヌの美しさ、勇気、素朴さそして善意に引きつけられ魅了されたのであった。

さて、マルシヤもまたジャンヌに引きつけられたのであるが、この青年は彼女を「ヴェレダ」という名で呼んでいる。これは一八〇九年に発表されたシャトーブリアンの歴史小説『殉教者たち』に登場する有名なドルイデス（ガリアの宗教ドルイド教の女祭司）の名前である。サンドの小説中ではドルイデスのイメージがたびたびジャンヌにかぶせられている。[15]そして、このふたりの若い娘の重ね合わせは、マルシヤの単なる思い付きではないのだ。

教養あるアラン司祭はジャンヌの母親チュラが古代のエプ＝ネル石の信仰を持ち続けていたのではないかと推測し、次のように言う。

> トゥルのような町は必然的にふたつの宗教を持たざるをえず、そして、実際に持っていました。バルロ山公認の、支配的な宗教がありました。エプ＝ネルの谷の奥まった所に、それに異議を唱える宗教があり、黙認されたり迫害されたりしました。自由な宗教、異端、こう表現されるかもしれませんが、それは「長がいないこと」を誇りにしていました。[16]

司祭によれば、ジャンヌは古代「プロテスタント」のドルイデスの血をひく娘なのである。小説の語り手はまた彼女を「急進的異端者」とも呼んでいる。その宗教的熱情ゆえに、ジャンヌはクロディーのような村娘たちの間でも孤

立していたのであった。だからこそ、マージナルな者同士であるマリとジャンヌはすぐにお互いを見つけて愛し合うようになったのである。やがてマリは、ジャンヌがジャンヌ・ダルクの生まれ変わりであると考えるようになる。

> 洗練とはほど遠い田舎の言葉に、羊飼いの杖を捨てて剣を手にする前の「オルレアンの乙女」の姿を見、その声を聞いたようにマリには思われた。混じり合ったやさしさと毅然とした態度、天使のような穏やかさと抑えられた情熱がヴォークルールのヒロイン[ジャンヌ・ダルクのこと]の特徴だったに違いない。そしてブロッス侯の夢想好きの後裔[マリを指す]は、美しき「羊飼いの娘」の魂が、力強さと栄光の苦しみにみちた輝きの中で再び姿を見せ変容を遂げるまで、ジャンヌの中に生き続け、地味で平和な暮らしの中で、つらい仕事の疲れをいやすために休息していると想像していた。[17]

しかしながら、これは夢想好きの少女の単なる空想ではなかった。というのも、物語の語り手がジャンヌの話をしながらあちこちでジャンヌ・ダルクを想起させようとするからである。たとえば、ジャンヌの家の火事の場面において、ギョームは彼女のことを「ドルイデスのように美しくて恐ろしい」と思うのであるが、この場面はさらに読者にジャンヌ・ダルクが死んでいくルーアンの火刑台を連想させるのである。また先に見たように、小説の終わり近くでジャンヌがモンブラの塔に閉じ込められ、そこから飛び降りて逃げようとするエピソードは、オルレアンの乙女の生涯における同じようなできごとと重なるのである。

だが、右のような類似点が表層的なものであるとしても、小説のもっと奥深く、本質にかかわる部分にも十九世紀版ジャンヌ・ダルクのイメージが浮かび上がってくる。物語の中でジャンヌ・ダルクが「偉大な女羊飼い」と呼ばれ、

その姿がつねにヒロインのジャンヌの後ろに透けて見えるのだ。もちろんこの小説のヒロインはオルレアンの乙女のようなドラマチックな生涯を送るわけではない。また、昔のジャンヌのように天の声を聞くのではなく、彼女が受け取ったのは不思議な三枚の硬貨にすぎない。（実際には眠っている彼女の手に三人の青年たちが握らせたものであった。）それはともかく、この新しいジャンヌ・ダルクの使命は、生涯にわたる純潔と清貧を誓い、「宝物」を見つけ出して、それを人々に分かち与えることであったとされている。また、ドルイデスのイメージと重ねあわされたジャンヌは、伝統的でガリア的な田園を象徴する存在であると考えることもできるだろう。十九世紀のジャンヌは田園を圧倒しようとする近代的な都市との不利な戦いに敗れて死んでいくのだ。彼女の戦場はこれらふたつの文明の境界に位置するブッサク城だったのである。

小説の終わり近くで彼女はこの世を去るが、彼女を理解し深く愛したふたりの人間を後に残していく。マリとアーサーである。彼らはやがて結婚する。「半分は町に半分は田舎に」位置するブッサク城を出て、マリは夫とともにおそらく田園で新生活を始めることになろう。語り手によれば、若夫婦の考え方や寛大で献身的な行いは、彼らの生きる悲惨な時代の一世紀先を行くものだった。おそらく彼らはジャンヌの探していた宝物（これは当時のサンドらが実現を夢見ていた、自由・平等・博愛を実践する理想的未来社会であると解釈することもできる）の一部を見つけることができるだろう。一八四八年の二月革命の四年前に刊行されたこの小説には、このようにサンド流ユートピアの夢が明らかに読み取れるのである。（当時の人々には希望に満ちているように見えた二十世紀が実際にはどんな世紀であったかは、『ジャンヌ』の約百年後に出版されるオーウェルの『一九八四年』などに象徴的に描かれることになるのであるが。）

以上のことから、ブッサク城はマージナルな人々の出会う場、また、ふたつの文明の葛藤の場として機能している

ことがわかる。そして、それらの出会いや葛藤を経て、よりヒューマニスティックでより調和のとれた新社会が現れるかもしれないと読者に予想させるのである。

5　おわりに

『ジャンヌ』の物語は三つの主要な場で展開されている。トゥルとその近郊、ブッサク城、モンブラの塔である。頻繁にジャンヌ・ダルクおよびドルイド教の世界に言及することによって語り手は、地理的・歴史的のみならず象徴と連想のレベルでもこれら三つの場所がいかに緊密に結びついているかを示している。

作品中でブッサク城は「町と田舎の境界」「貴族階級の昔の栄光の最後の名残」「マージナルな人々の出会いの場」として現れる。城のこれら空間的・時間的・社会的な三つの機能は次の三つのテーマを展開させることになった。つまり、「町による田舎の伝統の破壊」「貴族とブルジョワの敵対関係」そして「ユートピア実現の可能性」である。

最後に次の点も指摘しておこう。ヒロインが生まれ育った農村が前半の舞台となる『ジャンヌ』であるが、後半において城やブッサク一族やその客人たちが重要な役割を果たしているために、この小説はサンドのいわゆる田園小説群と社会主義小説群の境界に位置する作品となっているのである。

【注】

1　クルーズ県に実在。

2　クルーズ県に実在。サンドはここに滞在したことがある。

3　George Sand, *Jeanne*, Saint-Cyr-sur-Loire, Christian Pirot, 2006, p.52.本稿中の引用文の訳は次の翻訳書をもとに

坂本が適宜書き直させていただいた。ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』持田明子訳、藤原書店、二〇〇六年。

4 ビトゥリゲスもアルウェルニも古代ガリアの部族名。

5 *Jeanne*, pp.59-60.

6 *Ibid.*, p.153.

7 *Ibid.*, p.209.

8 現在はパリの中世美術館にある。

9 十五世紀のオスマン朝の王子。権力争いに敗れてロドス島に逃れ、そのあとフランスに送られた。

10 *Jeanne*, p.154.

11 Sand, *Promenades autour d'un village*, *Oeuvres complètes*, Genève, Slatkine Reprints, 1980, t.XXVIII に収録されている。和訳はサンド『魔の沼　ほか』（持田明子訳、藤原書店、二〇〇五年）に収録。

12 *Jeanne*, p.169.

13 *Ibid.*, p.274.

14 *Ibid.*, pp.192-193.

15 以下参照のこと。坂本千代「ロマン主義的女性像　女の神話と女祭司のイメージ」『近代』七八号、神戸大学近代発行会、一九九五年、二七五〜二八九頁。

16 *Jeanne*, p.107.

17 *Ibid.*, p.232.

（さかもと・ちよ　神戸大学大学院国際文化学研究科・教授　フランス文化学・文学）